GAS MUSEUM がす資料館　ギャラリー第65回企画展

～光の浮世絵師～
「小林清親」展

会期：２０１２年 １０月 ６日(土)～ １２月２４日(月・振休)

会場：＜GAS MUSEUM がす資料館＞ガス灯館２階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、ギャラリー第６５回企画展として、2012年10月　6日(土)から12月 24日(月・振休)までの期間、「～光の浮世絵師～『小林清親』」展を開催いたします。

下級武士の子として生まれた小林清親は、戊辰戦争という時代の大きな変化の後、刀を筆に持ち替え、１８７６年（明治９）から発表した木版画シリーズ「東京名所図」で人々の注目を集めました。
後に「光線画」と呼ばれる一連の作品で清親は、江戸から明治へと時代の変化に翻弄される東京の姿を、光の陰影を捉えて描きました。その作品は現在の私たちへ当時の様子を、情感を込めて伝えてくれます。
また同じ頃に清親は、木版画の技法を駆使して、西洋の油絵に並ぶような表現でいくつもの作品を手がけました。
しかし清親は１８８１年（明治１４）以降、「光線画」の制作をやめ、「ポンチ絵」と呼ばれる風刺画や歴史画、戦争絵などを描き、晩年は肉筆画を多く手がけました。
今回は館収蔵品より、清親の代表作である「東京名所図」と呼ばれる一連の作品を中心に、木版画の技法を駆使して油絵に迫るような写実的な表現で描いた作品などの３９点の作品を、期間中一部作品の模様替えをおこない紹介します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】　　学芸員　高橋　豊

【小林清親　略歴】

１８４７年（弘化４）幕府の本所米蔵の役人小林茂兵衛、母ちかとの間に生まれました。幼名は勝之助といい、末っ子の第九子でしたが、１８６２年（文久２）に父親が病死すると、十五歳で家督を継ぎ、元服して清親と名前を改め、幕府に仕えることとなりました。
戊辰戦争の後、幕府が崩壊して徳川家が静岡に移るのに伴い、一家を挙げて静岡に移りました。しかし１８７４年(明治７)５月に江戸から東京と名前を変えた地に戻りますが、同年９月に母親が亡くなると、絵を本業とするようになりました。
転機となるのは１８７６年(明治９)に版元松木平吉より出版された、５点の東京風景を描いた作品が評判を呼び、以後１８７９年（明治１２）からは版元福田熊次郎よりも「東京名所図」を刊行しますが、１８８１年(明治１４)のある時期より手がけるのをやめてしまいました。
その後清親は、風刺画や歴史画、新聞挿絵などを描くほか、日清・日露戦争時は戦争画も手がけました。
晩年は肉筆画などの作品などを描きますが、１９１５年(大正４)１１月２８日に六八歳の生涯を閉じました。

＜「東京名所図」について＞

１８７６年（明治９）8月３１日に版元松木平吉より出版された、５点の作品から始まった一連の東京名所図は当時評判を呼びました。
作品は東京各所を取り上げていますが、必ずしも「名所」と呼ばれる場所を取り上げているわけではありません。開化風俗を大きく取り上げている作品、江戸の風景の残る構図のなかに、街燈や人力車などの開化風俗をアクセントとして取り入れている作品、江戸時代とほぼ変わらぬ風景を描いている作品など、９３点制作されました。
作品を特徴づけているのは、ぼかしや彫りの技法を駆使して、ランプなどの新しい明かりや、陽光や月光などの自然の光が照らす様子と、光が生み出す影が交差した、一瞬の風景を描いているところです。
１８７９年（明治１２）からは、版元福田熊次郎からの出版が多くなりますが、１８８１年（明治１４）を境に清親は、「東京名所図」シリーズを突如制作終了してしまいました。
はっきりとした理由は分かりませんが、作品の需要がなくなったわけでなく、弟子の井上安治は師の清親の技法を受け継ぎ、その後も作品を制作していました。
９３点の作品は、シリーズとして計画されていたわけではなかったようです。現在ではこれらの作品を称して「光線画」と総称しますが、この言葉が出版当時から使われていたのかは確認できないものの、作品全体を端的に表していると言えます。

1）東京新大橋雨中図
小林清親　　1876年（明治　９）

2) 東京橋場渡黄昏景
小林清親　1876年（明治 9）

3) 東京銀座日報社
小林清親　1876年（明治 9）

銀座２丁目にあった日報社の建物を背景に、車道を走る人力車を中心に配置した構図で、開化東京の風景を描いています。
車道と歩道の境には、ガス燈のほか、街路樹として植えられていた桜や松が描かれています。
右奥に続く街路樹や行き交う馬車を淡い色で描き、手前の女性を乗せた人力車を、より際立たせています。

4) イルミネーション（復刻・復刷版）
小林清親　年代不詳

5) 江戸橋夕暮富士
小林清親　1879年（明治１２）

6) 日本橋夜
小林清親　1881年（明治１４）△

7) 浅草蔵前夏夜
小林清親　1881年（明治１４）■

8) 御茶水螢
小林清親　年代不詳

9) 高輪牛町朧月景
小林清親　1879年（明治１２）

10) 今戸有明楼之景
小林清親　1879年（明治１２）△

11) 大川岸一之橋遠景
小林清親　1880年（明治１３）■

12) 両国広小路
小林清親　年代不詳　△

一般には「両国雪中」「元両国広小路」と呼ばれています。作品は雲が厚くたれ込め、雪の降る両国広小路を行き交う人々が描かれています。
人々は灯りを手にしておらず、街燈として立つガス燈は、頭部のガラス部分が、空と同じ色調で描かれているところから、ガス燈が灯る前の、昼間の風景を描いていることが分かります。

13) 海運橋（第一銀行雪中）
小林清親　年代不詳　■

14) 本町通夜雪
小林清親　1880年（明治１３）△

15) 駿河町雪
小林清親　年代不詳　■

16) 旧本丸雪晴
小林清親　年代不詳

17) 品川海上眺望図
小林清親　1879年（明治１２）

18) 隅田川小春凪
小林清親　1880年（明治１３）

19) 隅田川枕橋前
小林清親　1880年（明治１３）

20) 千ほんくい両国橋
小林清親　1880年（明治１３）

21) 萬代橋朝日出
小林清親　1880年（明治１３）

22) 大伝馬町大丸
小林清親　1881年（明治１４）

23) 上野六角茶屋
小林清親　1880年（明治１３）

24) 赤坂紀伊国坂
小林清親　1880年（明治１３）

25) 第二回内国勧業博覧会表口
小林清親　1881年（明治１４）△

26) 第二回内国勧業博覧会内美術館噴水
小林清親　1881年（明治１４）■

27) 新橋ステンション
小林清親　1881年（明治１４）

28) 九段坂五月夜
小林清親　1880年（明治１３）

29) 柳原夜雨
小林清親　1881年（明治１４）△

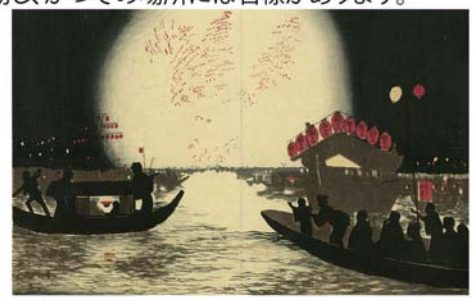
30) 五本松雨月
小林清親　1880年（明治１３）■

31）多目伊希
小林清親　　1881年（明治１４）

32）虎乃門夕景
小林清親　　1880年（明治１３）

33）梅若神社
小林清親　　年代不詳　　△

明治に廃寺になった木母寺（もくぼじ）から、由来する梅若伝説より、梅若神社と称された時期に描かれた作品です。
この作品の注目点は、雨の降る様子を白抜き線で表現するため、各色の版に線を刻み、重ね合わせる技法は、目を見張るものがあります。
神社は後に再び木母寺に名前を戻し、現在の地へ移動し、かつての場所には石標があります。



34）両国花火之図
小林清親　　1880年（明治１３）■

隅田川の川開きの夜景を描いています。
作品は船遊びをする人たちと同じ、水面からの低い目線から見上げた姿を描いています。
一瞬の光である花火を表現するために清親は、炸裂した花火を空に浮かぶ大きな円で、その中に赤く燃える花火玉を描いています。
屋形船や船上の人々をシルエットで表現することで、花火の明るさをより際立たせています。

35）浜町より写す両国大火
小林清親　　1881年（明治１４）

１８８１年（明治１４）1月２６日未明から、神田松枝町で発生した火災は、冬の乾燥したなか、北西の風に煽られて神田、日本橋、本所、深川の１万戸以上の家を焼く大火となりました。
展示２点のほかに「両国大火浅草橋」という作品を清親は描いていますが、制作するためのスケッチの最中、自宅を焼失してしまいます。
作品では、火災の炎をいくつもの色を重ねてたなびくように描き、その勢いを表現しています。

36）両国焼跡
小林清親　　1881年（明治１４）

37）久松町より見る出火
小林清親　　1881年（明治１４）

38）鴨と枯蓮
小林清親　　1879年（明治１２）

清親が木版画の技法を駆使して、「動物画」や「静物画」をテーマに、油絵に迫る表現に取り組んだ作品の一つです。
作品は日本画の画題にもなりうる、蓮池の水辺にたたずむ２羽の鴨を描いています。
背景の水面より伸びる枯蓮や水際の様子は、淡い単調な色調で描かれる一方、鴨の姿は羽根の質感や体の丸みを、いくつもの線の色を重ねて表現しています。

39）駿州湖日没の富士
小林清親　　1879年（明治１２）

※展示期間中、一部作品を展示替えいたします。
展示替えされる作品は、作品後ろの「記号」を参照願います。
前期：１０／８　～　１１／１８　記号「△」
後期：１１／２０　～　１２／２４　記号「■」

おもな参考文献

開化期の絵師 小林清親 吉田漱　（株）緑園書房　１９６４年
最後の浮世絵師　小林清親　吉田漱 編　蝸牛社　１９７７年
浮世絵大系１２　清親　（株）集英社　１９７６年
版画芸術６６　小林清親　阿部出版　１９８９年
日本の美術３６８　清親と明治の浮世絵　至文堂　１９９７年
日本印象派の先駆者「小林清親」展　太田記念美術館　１９８９年
明治の浮世絵師「小林清親」静岡県立美術館　１９９８年
近代錦絵の光芒「清親と安治」川越市立博物館　２００５年
謎解き浮世絵叢書
小林清親　東京名所図　（株）二玄社　２０１２年